よろこびあふれる心 ウォッチマン・ニー The Joyful Heart Watchman Nee

11 月 1 日

私にはやましいことは少しもありませんが、だからと いって、それで無罪とされるのではありません【1コリ ント】

『だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょ う?』と詩篇の作者は、訊ねています。これができる人は、 どこにもいません。自分の欠点を正しく知ることは、誰に もできません。エレミヤがあれほど強く言ったように、人 の心が何よりも陰険なものだとしたら、自分で心の中を 見つめようと試みても、どうして信頼をおけるでしょう? 陰険な心で自分を調べようとすれば、間違いなく嘘に染 まってしまいます。人の思考や感情は、非常に複雑なか たちで働きます。そこから引き出された知識は当てには なりません。正しく自分を判断することは、人にはできま せん。

内省が美徳ではなく、大きな誤りを生むのは、このため です。主の光が内側を照らすときだけ、人は、何が正しく、 何が間違っているかを、はっきり見極めることができます。 キリスト者が、自分の欠点を過度に突き詰めると、気持 ちが萎えてしまいます。自分の徳を思えば、尊大になり ます。自分のことを、安全、かつ、健全に知ろうと思えば、 神の光が、射し込むところに求めるしかありません。

November 1

For I know nothing against myself; yet am I not hereby justified. — 1 Corinthians 4:4

"Who can discern his errors?" asks the psalmist. The answer is, no one. By ourselves we cannot accurately know our faults. If, as Jeremiah said so forcefully, our hearts are deceitful above all things, then how can our attempts at introspection be trustworthy? Examining ourselves with a deceitful heart, we will inevitably be deceived. Our thoughts and emotions are highly complex in their working, so the knowledge derived from them is undependable. We cannot be accurate in our self-judgments.

For this reason, introspection is not a virtue, but a huge mistake. Only when the light of the Lord shines in is one able to discern what is right and what is wrong. If a Christian considers his defects overmuch, he is downcast; if he thinks upon his virtues, he grows proud. The only knowledge of self which is safe and healthy comes from the shining in of the light of God.

11 月 2 日

突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れた【使徒 9:3,4】

天からの本物の光は、知識を超えるものです。それは、 主ご自身を発見することです。主を見る者は誰であれ、 光を見るのであり、本当に光を見れば、私たちも地に倒 れます。教示には、このような効果はありません。人は、 いくらでも、教育的な内容の説教を聞き、聞いたことを覚 えておくこともできますが、それで、変わることはありませ ん。しかし、神からの本物の光が来た時は違います。そ の光が射し込む時、今見ている全世界に対して、私たち の目はくらまされ、その目は他の世界に対して開かれま す。これによって、私たちは本当の世界を見ることができ るのですが、そのために、初めに目は見えなくなり、私た ちはひれ伏すことになります。パウロが光を見たとき、地 面に打ちのめされ、その後、3日間、何も見えませんでし た。

光とは義です。それは、人が自分ではできないことを、な してくれます。イエスと敵対することが正しいと信じてこん でいたかつてのパウロのように、私たちもかたくなで、強 情で、説得にも耳を貸さないものであるかもしれません。 しかし、それでも、光が当てられたときは、心を解かれ、 弱められ、砕かれます。光はまず、私たちをへりくだる者 とした上で、私たちに見せてくれるのです。

November 2

Suddenly there shone round about him a light out of heaven: and he fell upon the earth. — Acts 9:3, 4

Real light from heaven is more than knowledge. It is the discovery of the Lord Himself. Whoever sees Him, sees light; and if we really see light, we will fall to the ground. Instruction does not have this effect. We may listen to any number of instructive sermons and even memorize their content, and still remain unchanged. But that never happens when true light comes from God. When that light dawns, it blinds our eyes to one whole world that they may be opened to another. It does indeed cause us to see, but first it blinds and prostrates us. When Paul saw the light, he was smitten to the ground and for three days could see nothing.

Light is rigorous. It can do to a man what he himself can never do. Like Paul, who truly thought he ought to oppose Jesus, we may be rigid and inflexible, resistant to all persuasion; but when that light shines we are softened, weakened, broken. Light has to humble us before it enables us to see.

11月3日

それから、彼は、その全部をアロンの手のひらとその 子らの手のひらに載せ、奉献物として主に向かって 揺り動かした【レビ記 8:27】

いけにえを捧げるこの儀式の中で、アロンとその子らの 手に載せられた血は、『聖別された羊』から取られたもの でした。これが完了した後、アロンの手の中に、『奉献 物』が置かれ、揺り動かされました。この奉献物を神に向 けて持ち上げたアロンの行動は、そのころ、『聖別』と呼 ばれていたものです。では、これを新約聖書の言葉で、 説明するとどうなるでしょう?

キリストが神の前にすべてを受け入れたおかげで、今、 私は神の声を聞き、御心を行い、主の道を歩くしもべの 立場にいます。これから後、私の耳、私の手、私の足は 神だけのものです。誰も、私の耳から人の声を聞くことは できず、私の手で他の人の命令に従うことはできず、私 の足で他の誰かの道を歩むことはできません。私は、さ らに先へと進みます。私は自分の両手をキリストで満た し、主を高く掲げます。これが意味するのは、私がここに いるのは神に仕えるためであり、私のからだはすべてそ の奉仕に捧げられているということです。

November 3

And he put the whole upon the hands of Aaron, and upon the hands of his sons, and waved them for a wave offering before Jehovah. — Leviticus 8:27

In this sacrificial ritual, the blood so placed on Aaron and his sons was taken from "the ram of consecration." When this had been done, then into Aaron's hands was placed "the wave offering." Aaron's action in lifting up this offering to God is what was then called "consecration." Can we now put this in New Testament terms?

According to the acceptance which Christ has before God, I now stand in the position of a servant who hears God's voice, does His will, and walks in His path. Hereafter my ears, my hands, and my feet belong exclusively to God. No one can borrow my ears to listen to another's voice, or my hands to do another's bidding, or my feet to walk in another's path. I even take a further step. I fill my two hands with Christ and uplift him. This means that I am here for the service of God and my whole body is devoted to that service.

11月4日

わたしを見た者は、父を見たのです【ヨハネ 14:9】

ことばが人となったという、すばらしい教えが聖書に伝え られています。私たちも、かつては、恵みと真実のすばら しさを知りませんでした。しかし、今、恵みは抽象的な概 念ではありません。私たちは主イエス様のいのちを通し て、恵みが人の間に生き、歩いているのを見たからです。 言うなれば、それは、人になったのです。同じように、真 実、清さ、また、忍耐を、主イエス様の中に見るまで、私 たちは知らなかったのです。

神は愛であるのに、神がどう愛されるか、私たちは何も 知りませんでした。今、この愛がナザレのイエスの中で、 降りてきたのを私たちは見ました。私たちは、霊を誤解し てしまい、霊的な人間は、微笑むことも、泣くこともなく、 人間的な感性を持っていないといと考えてきました。これ は、ひどい間違いでした!なぜなら、主の微笑みと涙の 中にある霊なるものを私たちは知っているからです。神 の中にあったとき、こういったものは、あまりに遠すぎて、 到底、手が届くものではなかったのです。イエスの中で、 それは手でつかめる近さにあります。

November 4

He that hath seen me hath seen the Father. — John 14:9

The great message of the Bible is that the Word became flesh. There was a time when we did not know what grace and truth were. But today grace is no longer an abstraction, for in the life of the Lord Jesus we have seen how grace lives and walks among men. It has, as it were, become flesh. Similarly, we did not know truth or holiness or patience until we saw them in the Lord Jesus.

God is love, yet we were ignorant of how he loves. Now we have beheld this love come down to us in Jesus of Nazareth. We misunderstood spiritually, thinking that a spiritual man should neither smile nor weep, but be totally devoid of any human feelings. How wrong we were! For in the smiles and tears of the Lord we comprehend what spiritually in fact is. In God, these things were too far off for us to apprehend them. In Jesus, they are close at hand.

11月5日

わたしはイスラエルの家の願いを聞き入れて、次の ことをしよう【エゼキエル 36:37】

神はここに、イスラエルの家を群れのように増やすという 目的を明らかにされています。神を知らないものであれ ば、主がそうなさりたければ、ただ、ご自身でその数を増 やせばよいのにと、いぶかるでしょう。神を行く道を妨げ るものなど、どこにもいないはずではありませんか!

しかし、ここで神はご自身の条件を述べておられます。 神がこれをなさるのは、イスラエルの家がその願いを聞 き入れてくださいと、求めたときです。ここに、踏み外すこ とのできない原則があります。神は、その目的をすでに 定めておられてますが、それを、求められていないのに、 自分から強要されることはありません。

今日の教会の、神の前における役割は何か、ここから、 論じることができます。教会をただ、集うための場所とは、 考えてはいけません。教会とは、尊い血であがなわれた 人々、霊によって生まれ変わった人々、御心がこの地上 でなされるようにと、神に祈り求める役割を負った人々の 集団です。ごく少人数のキリスト者の集団でも、祈ってい れば、その役に立つのです。神は、ご自身でされると決 めたことは何であれ、教会の祈りを通してなさいます。

November 5

For this, moreover, will I be inquired of by the house of Israel, to do it for them. — Ezekiel 36:37

God is here expressing His purpose to increase the house of Israel like a flock. Those unacquainted with Him will ask why, if He wants to do this, He does not Himself simply give the increase. Surely no one could stand in His way!

But here He states His condition. He will do it for them if He is inquired of concerning it by the house of Israel. The principle is unmistakable: God has a purpose already determined, but He will not force it through unasked.

From this we can move to the Church's function before God today. Never let us think of the Church simply as a place for meetings. No, the Church is a group of people, redeemed by the precious blood, regenerated by the Spirit, and committed into God's hand for the role of inquiry of Him in prayer until His will in the earth is brought to pass. The smallest group of Christians praying contributes to that. God will do whatever He has set Himself to do, through the Church's prayer.

11月6日

けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みを もって召してくださった方が、異邦人の間に御子を宣 べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示すること をよしとされたとき、…【ガラテヤ 1:15-16】

神は、パウロを生まれる前から選び分けていました。パ ウロが改心するまで就いていた仕事でさえ、前もって計 画されたものでした。いつもこのように、神は働かれます。 救われる前にあなたに起こったこと、救われた後に起 こったこともすべて、はっきりした意味があるのです。あ なたの持つ人格や気性、力と弱さが、どのようなもので あれ、すべては前もって神に知られており、いずれあな たに与えられる責務を視野に入れて、神が整えられたた ものです。偶然は何もありません。すべては神の摂理の うちにあるからです。意味もなく、与えられるものなどな いのです。

こうして、生まれたときから選び分けられているからには、 私たちの誰も、無関心、軽薄であることは許されません。 私たちは、一人一人がいつか、神の計画を知り、主の時 に、その道に進み始めることを、心に止めておかなくて はなりません。神は、私たちがまだ生まれ変わっていな かった日々を、何の価値もないもののように、書き飛ば すことはしません。私たちが、自分の中にある人間的な 側面を否定して、代わりに偽物で固めて、外面を飾りた てることを、神は望んでいません。神は、ありのままの私 たちを用いようとしておられ、見せかけではない、十字架 で清められた、本物の私たちを主への奉仕のために使 いたいのです。

November 6

But when it was the good pleasure of God, who separated me, even from my mother's womb, and called me through his grace, to reveal his Son in me. . . . — Galatians 1:15, 16

God had set Paul apart before he was born. Even the profession he learned before his conversion was preplanned. God works like that. All that happened to you before you were saved, as well as after, has some definite meaning. Whatever your character and temperament, whatever your strengths and weaknesses, all are pre-known by God and prepared by Him with future service in view. There is no accident, for everything is within God's providence. Nothing comes by chance.

Having been thus set apart from birth, none of us can afford to be casual or frivolous in our attitude to life. Each one of us must expect to discover what God has planned for us, and in His time and way to enter into it. God does not write off as valueless our unregenerate days. He does not want us to deny the very human elements in our makeup by presenting instead a false, because unreal, front. He has a use for the persons we are and intends to use the real us, purified by the cross, and not some pretense, in his service.

11 月 7 日

ダビデは、主の前で、カの限り踊った。ダビデは亜麻 布のエポデをまとっていた【2 サムエル 6:14】 サウルの娘ミカルは、夫が、神の箱の前で踊っているの を見て、心の中で彼をさげすみました。ミカルは、自分の 父のように、ダビデが王としての威厳を守るべきだと信じ たのです。しかし、ダビデの考え方は違っていました。神 の臨在のうちに、何の良い点もない自分が、さもしく、侮 蔑を受けて然るべきものと、ダビデには見えたのです。 王座についたダビデはイスラエルの支配者ではありまし たが、神の箱を前にすれば、自分も家来たちと変わらな い身分に過ぎなかったのです。

神に拒絶された後でさえ、サウル王は、預言者サムエル に民の前で自分を賛辞するよう求めて、面目を保とうとし ました。そして今、ミカルは同じ間違いを犯していました。 宮殿で生まれたミカルは、ダビデが、神の臨在のうちに、 王の威厳を受けるに値すると考えたのです。おそらく、父 親のように、ミカルも自分の威厳を保つことばかり考えて いたのでしょう。このような考え方は、実に不毛なもので す。本物の権威を振るうものは、こうではありません。そ のような人には、気高さはなく、自分の地位を守ろうと 汲々とすることもなく、むしろ、優しく、神の前にへりくだっ ていて、民の模範となるようなものです。

November 7

And David danced before Jehovah with all his might; and David was girded with a linen ephod. — 2 Samuel 6:14

Michal, the daughter of Saul, saw her husband dancing before the ark of God and despised him in her heart. He ought, she believed, to maintain his dignity as king, just as her own father had tried to do. But David viewed things differently. In the presence of God he saw himself as base and contemptible, having no special standing whatever. Though on the throne he was Israel's king, before the ark of God he was on the same level as his subjects.

Even after God had rejected him, King Saul had sought to save his face by asking Samuel the prophet to honor him before the nation. Now Michal was making the same mistake. Born in the palace herself, she considered that David merited the dignity of king in God's presence. Perhaps, like her father, she too had her own majesty to think of. That way lies fruitlessness. The one who wields true authority is otherwise. He will not be high-minded, grasping to preserve his position, but meek and humble before God, a model to his people.

11月8日

またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄 光をお受けになるためです【ヨハネ 14:13】 ヨハネの福音書の第 14 章、15 章、16 章の中で、主は 『わたしの名によって』という言い方を繰り返し使われて います。この言葉が示すのは、主が、御父から、すべて の名にまさる名をお受けになるということだけではありま せん。弟子たちも、主の御名を使うことを許されていると、 教えてくれているのです。イエスの名は、主が、神から受 けたものです。『イエスの名による』ものを、神の子供た ちが等しく受けています。主は、私たちに、途方もない価 値のあるものをお委ねになったのです。主が私たちに、 ここまで大きな信頼を与えてくださっていることを、分かっ ているでしょうか?

私たちは、友人にこんなふうに言うことがあります、『あ の人のところへ行って、こう伝え、こうするように言ってく ださい。』そして、こう付け加えます、『何か訊かれたら、 私の頼みだと言ってください。』これが、『私の名によっ て』という言葉に込められた意味です。その名前の後ろ に隠された影響力を行使することを意味しています。自 分の名と、そこに込められた権威を、人に託す時、あな たは、その人があなたの名において行うことに責任を 負っています。主イエスの御名は唯一のものであって、 すべての名にまさるものです。それでありながら、主はそ の名を私たちに委ねたいと望んでおられるのです。そし て、主ご自身が、その責任を負うことも願っておられます。 これがどれほどの栄誉であるか、本当に理解しているで しょうか?

November 8

And whatsoever ye shall ask in my name, that will I do, that the Father may be glorified in the Son. — John 14:13

We find in John chapters 14, 15, and 16 that the Lord constantly uses the phrase "in My name." Not only does this indicate to us that He will receive from the Father a name above all names. It tells us also that His name is something which His disciples may use. The name of Jesus is what He has received from God: "in the name of Jesus" is what the children of God share. He has trusted us with something of tremendous value. Do we recognize it as the greatest trust which He could have committed to us?

Sometimes we say to a friend, "Go and tell so and so to do this or that," adding, "If he questions it, tell him I say so." This is what is implied by "in my name." It simply means using the name with the power behind it. You give your name with its authority to a certain person; and you are then responsible for whatever he does using your name. The name of the Lord Jesus is unique, a name above all names, neverthless, He is willing to entrust His name to us, and Himself to take responsibility for our use of it. Do we truly appreciate the honor He does us?

11月9日

ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。 わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます【マタ イ16:18】

このすぐ後で、主は、シモン・ペテロにこう言わなくてはな らなかったことを思い出してください、『さがれ、サタン。』 サタンに支配された人が、どうして、教会を打ち建てるた めに用いられるでしょう?教会とは、ハデスの門も、打ち 勝てないほどのものです。用いられることは、決してあり ません。シモンは、ペテロ、すなわち、『岩』という名を受 けてはいても、彼の性質はそれに見合うものではなく、 御国への鍵を使うまでには至っていなかったのです。

優柔不断な気質を持つものは、人をいのちへ導く扉を開 けるという、主のはたらきに就くことはできません。宣教 者の性格と、その人が確信に満ちて、時には、大胆に伝 える真実は一致したものであるべきです。その真実とは、 イエスが死んで、よみがえり、死に勝利したことです。ペ テロにとっては、それはまだ、起こっていないことでした。 しかし、ああ、死の門が、多くのキリスト者の働きを打ち 破ってしまいます。これは、主のしもべたちが、自信に欠 けているからです。神を讃えましょう。キリストの十字架 は、ペテロを変え、キリストに信頼する全てのものを死か ら救い出すのに十分な助けを与えてくださったのです。

November 9

And I also say unto thee, that thou art Peter, and upon this rock I will build my church. — Matthew 16:18

Remember that shortly after this the Lord had to say to Simon Peter, "Get behind me, Satan." How could a man overcome by Satan be used to build up a Church against which the gates of Hades were to prove ineffective? We know he could not. Although Simon had received the name Petros, "a rock," his character did not correspond to his name; so as yet he was unable to use the keys of the kingdom.

No one who is of an irresolute temperament can exercise a ministry of opening the doors to welcome men into life. There must be a correspondence between the character of the minister and the confident, even defiant, truth he ministers; namely, that Jesus has died and risen again victorious over death. For Peter, that still lay ahead. But alas, death's gates do prevail over much Christian work, because His servants lack that confidence! Praise God—the cross of Christ released resources enough to transform Peter and to deliver from death all who place their trust in Christ.

11月10日

さあ、ツァレファテに行け。見よ。わたしは、そこのひ とりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている 【第一列王記】

人には、ひしゃくだけを見て、泉を忘れる性向があります。 そのため、神は、必要なものを、いつも違うかたちでお与 えになります。人が天のみなもとから、目をそらさないよ うするためです。こうして、かつて、私たちに暖かい恵み の雨を注いでくれた天は青銅のようになり、人を回復さ せてくれた川は渇くことを許され、日々の糧を運んでくれ た烏たちも、もはや訪れることがありません。それでいて、 神は、貧しいやもめの女を通して、必要を満たしてくださ り、私たちを驚かせます。こうして、人は神の奇跡的な満 たしの豊かさに気が付くのです。

私たちは、この地上における神の代弁者であり、神の真 実さを明らかにするためにここにいるのです。神だけが 私たちの必要を満たしてくれるみなもとであると、私たち の態度、言葉、行いの全てが、告げ知らせていなくては いけません。そうしなければ、主が持つ栄光を消し去っ てしまうことになります。隠れた所で見ておられるお方が、 私たちの必要なものを知っていてくださいます。そして、 出し惜しみすることなく、『キリスト・イエスにあるご自身 の栄光の富をもって』、すべて満たしてくださるのです。

November 10

Arise, get thee to Zarephath; . . . behold, I have commanded a widow woman there to sustain thee. — 1 Kings 17:9

Because of our proneness to look at the bucket and forget the fountain, God has frequently to change His means of supply to keep our eyes fixed on the source. So the heavens that before sent us welcome showers become as brass, the streams that refreshed us are allowed to dry up, and the ravens that brought our daily food visit us no longer. But then God surprises us by meeting our needs through a poor widow woman, and so we prove the marvelous resources of God.

We are the representatives of God in this world, and we are here to prove His faithfulness. Our attitudes, our words, and our actions must all declare that He alone is our source of supply, or He will be robbed of the glory that is His due. He who sees in secret will take note of our needs, and He will meet them, not in stinted measure, but "according to His riches in glory by Christ Jesus."

11 月 11 日

見よ。わたしはあなたとともにある。…わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない【創世記 28:15】

神は、行動の神です。正当な教理を聞くことが、恵みを 受けるただひとつの道であると考える人もいるかもしれ ません。しかし、主が取られる方法は、実践的なもので、 過ちを悔いる経験を与えたり、それぞれの人生に異なっ た環境を作り出して、人を鍛錬し、成長させます。私たち も、ヤコブのように、意味のないものを神に差し示すこと もありますが、神は忍耐強く、共に働いてくださいます。 神は、私たちよりずっと粘り強く、目的を追い求める方で す。

それ以上に、希望を持てることがあります。神が定めた 目的を実現させるために、自分がどんな働きをすべきか、 それがどのように実現されるか、私たちは知らなくてよい のです。最も哀れなのは、自分が間違っていることに気 付いていない人たちです。それでも、神は、そのような人 たちの暗い面に、光を当てるよう用意しておられます。主 が決めた時に、主のやり方で、ご自身で定めた務めを完 遂されます。

November 11

And behold, I am with thee; . . . I will not leave thee, until I have done that which I have spoken to thee of. — Genesis 28:15

God is an acting God. We may think that hearing sound doctrine is the only means of grace; but His means are practical, the chastening of experience, the provision of a host of different circumstances in our lives for training and profit. We may, like Jacob, represent unpromising material for Him, but He works on patiently with us. He is more tenacious than we are in the pursuit of His goal.

And here is further ground for encouragement. We do not have to know what work is needed or how it is to be realized in order that God may effect what He has set out to do with us. The most unpromising people of all are those who are wrong but who do not know it; yet even so God has His own way of bringing light into their darkness. In His own time and His own way He will finish the task He has set Himself.

11月12日

各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明ら かにするのです【1コリント3:13】

木やわらが、家を建てるのに適した材料ではないとした ら、切り株はもっと使い道がないでしょう。人間の努力と いう、不確かなもので満ちた世の中でも、最も頼りがい のないものを現しているようです。神のために何かを建 てようとするとき、自分の感覚に頼って、また、一時の思 い付きや、人に喜ばれるものを目指して作れば、その時、 私たちは切り株で建てているのです。いつか、来る日に そのことが明らかにされます。

神の計画によらず、移り気な感情に動かされて働いても、 時には、何かの進展があるように思えるでしょう。しかし、 そんなものは簡単に消え去ってしまいます。風が吹き返 すたびに、移り変わる天気を見て、一時の感情でする努 力を思い起こすことがあるかもしれません。今日はここ にあっても、明日にはどこかへ行ってしまうのですから。 神は、キリストにおいて、ずっと信頼でき、確実な建材を 用意されました。それは、やがて来る日に明らかにされ るでしょう。

November 12

Each man's work shall be made manifest: for the day shall declare it. — 1 Corinthians 3:13

If wood and hay are unsuitable building materials, how much more so is stubble. It seems to represent what is least reliable of all in the unsubstantial realm of man's efforts. Whenever we build for God according to our feelings, according to the whim of the moment or the applause of the crowd, we are building with stubble. The day will declare it.

Labors that are governed, not by God's program, but by our own fickle emotions, may seem to make such progress at times, but may just as easily fade out. It is so possible to reflect the changing moods of the weather, depending on the wind of revival to arouse an emotional effort that is here today and gone tomorrow. God has made provision in Christ for better, more solid construction than that, as the day will ultimately declare.

11月13日

キリストが現われたのは罪を取り除くためでした。キリストには何の罪もありません。だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちを歩みません【1ヨハネ3:5,6】

私たちの中には、自分にしたくない何かを強い、本当は 生きたくない生き方を選んで、キリスト者であるとは、そう 努めることだと考える人がいます。これは、神がキリスト のうちに与えてくれるものと、あまりにかけ離れています。 キリスト者の人生は、キリストにあるいのちを賜物として 自分のうちに受け、そのいのちにあって生きるものです。

キリストのいのちの性質とは、世を愛さないこと、世から

離れること、そして、祈りとみことばと神との交わりを大 切にすることです。私も、こういうことを、自然にできるわ けではありません。持って生まれた性質から言えば、私 も、自分を追い込まなくてはいけません。しかし、神は新 しい性質を備えてくださいました。そして、神は、ご自身 で備えられたものから、私が益を受けることを望んでおら れます。標準を作られるのは神ですが、キリストがその 宝庫を見せてくれます。力、いのち、神の恵み、これらす べてを私たちは受けて、神の標準へと到達することがで きます。

November 13

He was manifested to take away sins; and in him is no sin. Whosoever abideth in him sinneth not. — 1 John 3:5, 6

Some of us force ourselves to do things we don't want to do and to live a life we cannot in fact live, and think that in making this effort we are being Christians. That is very far removed from what God offers us in Christ. The Christian life is lived when I receive the life of Christ within me as a gift, to live by that life.

It is the nature of the life of Christ not to love the world, but to be distinct from it, and to value prayer and the Word and communion with God. These are not things I do naturally; by nature I have to force myself to do them. But God has provided another nature, and He wants me to benefit from the provision He has made. God sets up a standard, but Christ shows us His storehouse. Strength, life, grace from God, all are ours to receive that we may measure up to the divine standard.

11月14日

ヤコブは彼らを見たとき、「ここは神の陣営だ。」と 言って、その所の名をマハナイムと呼んだ【創世記 32:2】

神の天使を垣間見ただけで、ヤコブにカナンへの帰還を 確信させるには十分だったはずです。しかし、この後に 来る数節を見ると、ヤコブは兄に対する恐怖に負けて、 自分の民と持てるものを『二つの宿営』に分けてしまった ことが分かります。ヘブライ語では同じ言葉、マハナイム は、二つの陣営をさしています。ヤコブが以前、使った言 葉です。しかし、今や、ヤコブは自分自身のマハナイム を、神のものと代えました。それは、『二つの陣営』、すな わち、神の宿営と、この世の宿営がかつてあったところ でしたが、ヤコブは、神の宿営を忘れ、彼のものであるこ の世の宿営を二つに分けたのです。そして、彼は初めて の本当の祈りを捧げました。 かつてのヤコブは、悪巧みと損得勘定ばかりしていて、 人生に祈りはありませんでした。それが今ではたくらみと 祈りとなりました。しかし。祈れば、何かをたくらむ必要は ないのです。たくらみをするなら、祈りには意味はなくな ります。しかし、ヤコブはその両方を行ったのです。片方 においては神を信じ、他方では、自分で働きました。幸い なことに、その夜、神が彼の前に現れたのでした。

November 14

And Jacob said when he saw them, This is God's host; and he called the name of that place Mahanaim. — Genesis 32:2

This glimpse of the angels of God should have sufficed to reassure Jacob on his return to Canaan. The verses which follow, however, tell how fear of his brother overcame him and led him to divide his people and possessions into "two companies." Here we find in Hebrew the same word Mahanaim, two hosts, that Jacob had used before. Now, though, he had substituted his own mahanaim for God's. Where there had been "two hosts" before—namely one heavenly company and one earthly, his own—he now forgot the former and divided his earthly company into two. He then prayed his first real prayer.

In Jacob's early years it was all scheming and bargaining, and no prayer. Now it was both scheming and prayer. Yet if we pray, we need not scheme. If we scheme, there is no meaning in our prayer. Jacob, however, did both: on the one hand he trusted God, and on the other hand he did the work himself. Happily for him, it was on that night that God met him.

11月15日

このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、 人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられ るあなたがたの父をあがめるようにしなさい【マタイ 5:16】

神のいのちが私たちの中に植えつけられました。それ自体は周りの世界から見れば、完全に異質でありながら、 この世の本当の性質を照らし出すようにと、神が設計した光源です。その光によって、この世界が、生来持っている暗闇の深さが強調されます。ここで明らかになるのは、今日、自分をこの世から断ち切り、そこにある生来の光を奪っても、決して、神に栄光を帰すことにはならないということです。それは、私たちを通して全人類に仕えるという神の御心を、妨害するだけです。

別のたとえを使えば、教会は、神の敵対者の側から見れ ばトゲのようなものであり、その相手にとっていつまでも なくならない悩みの種です。私たちはこの世にいるだけ で十分、サタンに山のような苦しみを与えているのです。 それをやめる理由がどこにあるでしょう?教会は神に栄 光を帰しますが、それは、世から離れることではなく、そ の中に神の光を放つことによって行われます。天国は、 神に栄光を帰すところではなく、神を讃えるところです。 神に栄光を帰す場所はここです。

November 15

Even so let your light shine before men; that they may see your good works, and glorify your Father who is in heaven. — Matthew 5:16

The divine life planted in us, itself so utterly alien to the world around it, is a light-source designed by God to illuminate the world's true character. It does this by emphasizing through contrast the world's inherent darkness. From this it is clear that to separate ourselves from the world today, and thus deprive it of its own light, is no way to glorify God. It merely thwarts His intention of serving mankind through us.

The Church, to use another metaphor, is a thorn in the side of God's adversary, a source of constant annovance to him. We make a heap of trouble for Satan simply by being in the world. So why leave it? The Church glorifies God, not by getting out of the world, but by radiating His light in it. Heaven is not the place to glorify God; it will be the place to praise Him. The place to glorify Him is here.

いやりのある兄弟姉妹たちに対してでした。このような人 たちに、すぐに主への奉仕を始めてもらいましょう。専門 家の到着を待つことはありません。そうすることで、教会 の奉仕とは本来、なんであるか、私たちにも分かってくる はずです。

November 16

I have set before thee a door opened, which none can shut. — Revelation 3:8

If God is going to have a witness in the earth today, He must have the service of all His less-gifted servants, His "one-talent" men. We might imagine that if He were gracious to His Church, He would give us more people like Paul and Peter; but in fact He seldom does so. The Church of God is full of ordinary, one-talented believers, and if only we would abandon our personal ambitions and seek instead ways for them to serve him, wonderful things would happen.

The Church needs leaders, but it also needs brothers. I believe in authority, but I believe also in brotherly love. In Philadelphia they respected authority, for they kept the Lord's word and did not deny His name. But philadelphia in Greek means "brotherly kindness." It was to these caring brothers and sisters that the door was opened. Let them set out to serve Him together and not wait for the specialists; then we shall begin to see what the Church's service really is.

11月16日

わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなた の前に開いておいた【黙示録3:8】

神が今日、この地上で証人を求めるなら、大した取りえ もない多くのしもべたち、『どこにでもいる』人たちの奉仕 を受けるしかないのです。主が、本当に教会に対して恵 み豊かであるなら、パウロやペテロのような人をもっと 送ってくれるはずではないかと思うかもしれません。しか し、そうされることは滅多にありません。神の教会は、普 通の、どこにでもいる信者ばかりがあふれています。そ して、私たちが個人的な欲望を捨て、この人たちが主に 仕える道を求めるだけで、素晴らしいことが起こることで しょう。

教会には指導者が必要ですが、同時に兄弟たちも必要 です。私は、権威を信じますが、兄弟愛も信じています。 フィラデルフィアの人々が権威を敬ったのは、確かに、彼 らが主の御ことばを守り、主の御名を拒まなかったから です。しかし、ギリシャ語でフィラデルフィアとは、『兄弟 の優しさ』を意味しています。扉が開かれたのは、この思

11月17日

あなたがたはわたしの証人。わたしのほかに神があ ろうか。ほかに岩はない。わたしは知らない【イザヤ 44:8

証人になるとは、誰もがすでに持っている知識を広める ことではありません。ほとんど知られていない真実へと、 目を向けさせることです。世界の始まりの時代、あまりに 多くのことが起こったため、神はそこに証人をおきたいと 思われました。今とはすべてが違っていた時代の、人々 と土地のことです。彼らを通して、神はご自身の義と親愛 という福音を、地上の全ての国へともたらすことになりま す。

私たちに与えられた責務も同じです。くもりのない神との 交わり、お互いを真摯に支え合うこと、美しいキリスト者 の生活、この全てがあっても、まだ十分ではありません。 そこに証人が必要なのです。教会は金の燭台にたとえら れています。飾りではありません。また、黄金であるだけ では、十分とは言えません。神の光を、この暗い世界の 隅々にまで広めなくてはならないのです。

November 17

Ye are my witnesses. Is there a God besides me? yea, there is no Rock; I know not any. — Isaiah 44:8

To witness is not to disseminate knowledge which everyone already has, but to point to truth that few are aware of. Because of conditions generally in the ancient world, God wanted within it a witness—a people and a land where things were different. Through them, He would bring the Good News of His justice and loving-kindness to all the nations of the earth.

Our commission is the same. Unclouded fellowship with God, faithful exhortation of one another, beautiful Christian lives, all are not enough. There must be witness. The Church is likened to a golden lampstand, not an ornament. Nor is it enough that it should be of gold; it must shed forth the light of God into every corner of this dark world.

11月18日

では、子どもたちにはその義務がないのです。しかし、 彼らにつまずきを与えないために、…わたしとあなた との分として納めなさい【マタイ 17:26,27】

神は、御子が宮の納入金を納めなければならないとされ たことはありません。神の御子である主は、このことに関 して、何ひとつする必要はなかったのです。確かに、主 にとってそうすることは、ご自身を、『ほかの人たち(25 節)』と同じ、間違った立場におくことだと、人は感じるか もしれません。では、なぜ主はそうされたのでしょう?『彼 らにつまずきを与えないために』です。

あなたも、まさに神の御子であるこの方から、同じ言葉を 投げかけられたことはありませんか?どんな時も、主が、 義務を果たさなかったことがあるかと言う点については、 疑問の余地はないでしょう。しかし、問題はそこではあり ません。大切なのは、むしろ、主が自分の特権をお捨て になったことです。これが、十字架の道であり、その原理 は意義深く、綿密に組み立てられたものです。キリストの 十字架はこのようなかたちで、神の御心を現してくれま す。すなわち、主のように、私たちも自分を喜ばせようと はしないことが大切です。他の者たちが心に傷を受ける ことがないためです。

November 18

Therefore the sons are free. But, lest we cause them to stumble . . . give unto them for me and thee. — Matthew 17:26, 27

God had never laid it down that His Son must pay

the Temple tax, and as Son of God there was no necessity for Him to do anything whatever about it. Indeed, we might feel that for Him to do so would be to put Himself in the wrong position of the "stranger" (verse 25). Then why did He do it? "Lest we cause them to stumble."

Has it occurred to you that the very Son of God himself uttered these words? There could of course be no question at any time of his evading a duty; but that was not the point at issue here. It was a question rather of His discarding a privilege. This is the way of the cross, and the principle is a significant and searching one. The cross of Christ presents us with this expression of God's will; namely, that like Him, we are required to forego what we might enjoy, in order that others be not offended.

11 月 19 日

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、 すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知ら ないことに決心したからです。あなたがたといっしょに いたときの私は、弱く、恐れおののいていました【1コ リント 2:2-3】

初めの文章はパウロの伝える言葉について語ったもの で、二つ目は、その人柄を現しています。神が求めるの は、十字架のメッセージを述べ伝える者は、十字架の苦 しみを受けるべきであったこと、パウロ自身の言葉を借り れば、彼らも、ともに十字架につけられたと知るべきであ ることです。私たちはよくこう考えます。パウロのような人 が立ち上がって、話す時、持てる才能を信じ、自信にあ ふれていたに違いないと。しかし、パウロが語ったのは、 『弱さのゆえに十字架につけられた』イエス・キリストであ り、そのため、彼は、自分の弱さをはっきり意識しながら、 語らざるを得なかったのです。

神は、私たちから、自分を養う力を奪おうとしますが、そ れを受け入れなくてはなりません。主の御前に、自分の 力では何もできないことを告白してはじめて、キリストは、 その御力を私たちの上に現すことができるのです。十字 架の死を通り抜け、いのちを受けて再びよみがえるとき、 人は、神のものとなり、主に大いに用いられるのです。

November 19

For I determined not to know anything among you, save Jesus Christ, and him crucified. And I was with you in weakness, and in fear, and in much trembling. — 1 Corinthians 2:2, 3

The first of these statements applies to Paul's message, the second to his person. God requires that those who proclaim the message of the cross should have suffered the cross—should know

themselves to be, in Paul's own words, crucified with Christ. We often think that when a person like Paul got up to speak, he must have felt confident in the strength of his own resources. But Paul's theme was Jesus Christ "crucified through weakness," and it was necessary, therefore, that he should tell it in conscious weakness himself.

We must allow God to cancel our self-sufficiency. When we confess before Him that we can do nothing in our own strength, then Christ will be able to manifest His power upon us. That which passes through the death of the cross and rises up again in life is of God, and being so will count mightily for Him.

11月20日

世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでない ように、彼らもこの世のものでないからです【ヨハネ 17:14】

私たちを選ぶ神の立場からすれば、私たちは、世から 『取り去られ』るのですが、私たちの新しいいのちから見 れば、私たちはこの世のものとはまったく違う、上からの ものです。神の人たちである私たちにとって、天国は、目 的地というだけでなく、源でもあります。これは、驚くべき ことです。あなたや私の中に、別の世界で作られた要素 が入っているのですから。この世がどれだけ移り変わっ ても、私たちの中にあるこの要素は、完全に外の世界か ら来たものなので、世に合わせて変化することはありま せん。神の賜物として私たちが受けたいのちは、この世 と釣り合うところはありません。しかし、天と完璧に一致し ています。

私たちは日々、世と慣れあうことはあっても、そこに安住 することはなく、気持ちが落ちつくことはありません。私た ちの中にある神から来たものに、世が出会うと、そこに 敵意が吹き出します。これは驚くには値しないことです。 世がその性質のままに進んでいけば、一人のキリスト者 も生まれることはないからです。

November 20

The world hated them, because they are not of the world, even as I am not of the world. — John 17:14

From the standpoint of God's choice of us, we are "taken out of " the world; but from the standpoint of our new life, we are not of the world at all, but from above. As the people of God, heaven is not only our destiny, but our place of origin. This is an amazing thing, that in you and me there is an element that is essentially other-worldly. So other-worldly is it that no matter how this world may progress, that element in us can never become like it. The life we have as God's gift has no correspondence with the world, but is in perfect correspondence with heaven.

Though we may mingle with the world daily, it will never let us settle down and feel at home there. As soon as the world meets in us that which is of the divine nature, its hostility is at once aroused. This is not surprising, for let the world evolve how it will, it can never produce one Christian.

11月21日

主はこう仰せられる。『この谷にみぞを掘れ。みぞを 掘れ。』【第二列王記 3:16】

いかなる時代も、人の不信仰は、神の全能の力をくじい てきました。イスラエルの歴史には、繰り返し、このこと が現れています。もちろん、人間には神がまだ与えてい ないものを取る権利はありません。しかし、本当は得るこ とができた多くのもののうち、ほんの小さな一部しか手に 入れていないことは、実によくあるのです!神が力をふ るおうとしても、民の不信仰のために、制限されてしまう ことは厳然たる事実です。

メシャとモアブ人が打ち負かされたこの出来事において は、事実はそうではありませんでした。信仰が勝り、神の 力が、見事に示されました。これは、ただ、エリシャの言 葉に従って、人間たちが土を掘るという単調な仕事に全 精力を傾けたからです。神の人々が掘りあげたみぞは、 神が奇跡をなす力を注ぐ道を開きました。今日でも、しば しば、神の祝福の水は人間という管を通って解き放たれ ます。

November 21

Thus saith Jehovah, 'Make this valley full of trenches.' — 2 Kings 3:16

The history of Israel illustrates again and again how at any time man's unbelief can limit the omnipotence of God. Of course, man has no right to take what God has not given him, but how often do we find, rather, that what he takes possession of is but a fraction of what he might have had! It is a solemn fact that God's exercise of power can be limited by His people's unbelief.

On this occasion of the defeat of Mesha and the Moabites, the situation was otherwise. Faith prevailed and there was a wonderful display of divine power, but only because, in obedience to Elisha's instructions, men had got down to the monotonous task of digging. The trenches which His people prepared opened up the way for God to pour in His miracle-working power. Often, even today, the water of divine blessing finds its release through human channels.

11月22日

今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか【ヨハネ 12:27】

主の祈りは、いつでも完璧な祈りでした。エルサレムに 入って、十字架と向かい合うとき、主は、立ち止まって、 ご自身にこう尋ねました、『何と言おうか?』イエス様は、 死を少しも恐れてはいなくとも、やはり、ご自身の感情も 持っておられました。主は、ご自分の心をしっかりと、見 つめ直して、こう思われました、「『父よ。この時からわた しをお救いください。』と言おうか?いや、それはできな い。」主には、そのような祈りはできなかったのです。こ の時が来た理由をご存知だったからです。『父よ。御名 の栄光を現わしてください。』この祈りは直ちに、応えら れました。

この地上に人としておられ、祈りへのカギを持っていた 主も、これほど厳然と、自身の気持ちを退けて、神の御 心を求めたのです。どうして私たちが、一時の感情に任 せて、口を開き、祈りの中で思いつくままの言葉を神に 投げかけてよいことがあるでしょう?自分にこう訊いてみ ましょう、『何と言おうか?』それから、イエスさまの答え をかんがみながら、その問いに応えてみましょう。こうし て、神の御心の完全さを証明し、経験しようではありませ んか。

November 22

Now is my soul troubled; and what shall I say? — John 12:27

The prayers of our Lord were always perfect prayers. Entering Jerusalem and facing the cross, he stopped to ask himself the questions, "What shall I say?" Jesus had no fear of death; yet at the same time He had His own feelings. He turned the matter over carefully and thought, "Shall I say, 'Father, save me from this hour?' No!" He could not pray that prayer, for He knew for what purpose He had arrived at that hour. So he prayed, "Father, glorify Thy name!" That prayer was answered immediately.

If our Lord, as Man on the earth and possessing the key to prayer, had in this deliberate way to set aside His own will and seek the will of God, how dare we, on the impulse of the moment, open our lips to utter words at random in our prayers to God? Let us ask ourselves, "What shall I say?" Then let us answer that question in terms consistent with the answer of Jesus. So shall we prove and experience the perfect will of God.

11 月 23 日

なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わた しの受けるべきバプテスマを受けはします【マルコ 10:39】

ヤコブとヨハネは主イエス様の栄光の御座の隣の席に 座りたいと願ったのです。しかし、そのようなことを頼むこ とはできないと知っていたので、あえて口にはせず、自 分ちの願いをかなえていただきたいと、遠回しにうかが いました。イエス様はすぐに、その頼みには応じず、何を して欲しいのかと言われました。彼らの要求にはふたつ の意味がありました。ひとつは主の近くにいたいという気 持ちであり、もうひとつは他のものより、大きな権威をふ るいたいという欲望でした。

キリストのそばにいたいという思いに、何も悪いところは なく、主のその願いを拒みませんでした。主がはっきりさ せたのは、ただ、その願いがかなえられるためには、主 が飲む苦しみの杯を飲み、主の受けるべき死と復活の パプテスマを受けなくてはならないことでした。この二人 の兄弟は、自分たちが何を頼んでいるか、分かっていな かったし、またイエス様も彼らのしていることを、誤りとは されなかったのです。主は、彼らがこのような望みを持っ ていることで、個人的に叱ることすらなく、彼らが求める ようなことを願ってはならないとだけ、お答えになりました。 将来、イエス様の近くに住むために求められる条件はた だひとつ、今、主のそばに行くことです。

November 23

The cup that I drink ye shall drink; and with the baptism that I am baptized withal shall ye be baptized. — Mark 10:39

James and John longed to sit on either side of the Lord Jesus in His glory. Knowing, however, the inappropriateness of such a request, they dared not come out with it, but subtly suggested that He give them anything they might ask for. Jesus did not at once comply; instead He asked what they wanted. Their request carried two meanings: one a desire to be near the Lord, the other an ambition to wield more authority than the rest.

It was quite right for them to desire nearness to Christ, and He did not reject their desire. He simply assured them that to see it fulfilled they must drink His cup of suffering and be baptized with His baptism of death and resurrection. These two brothers did not know what they were asking, but neither did Jesus find fault with them for doing so. He did not even rebuke them personally for their ambitions, but replied that what they sought was not to be had for the asking. Nearness to Jesus in the future requires one condition only: nearness to Him now.

11月24日

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、…キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン【黙示録 1:5,6】

キリストの尊い血による贖いを思い出す時、私たちの心 は、いつでも感謝と賛美であふれかえります。他に何も 言えることはありません。この上に、なにひとつ願うべき ことなどなく、実際のところ、これ以上何かを求めるのは、 おかしなことです。主がすでになされたことを、もう一度 するよう、求めることはできません。主がされたことを、心 から感謝するだけです。

感謝を捧げるのは、主がしてくれたことを心にとどめるた めですが、賛美はさらにその先に進みます。私たちは、 主が主であられることを讃えます。私たちは、一度は主 への感謝でいっぱいになっていました。しかし、初めの感 激が消えるに連れ、それに引き付けられることもなくなっ てゆきました。私たちは、出来事ではなく、人としての主 の存在と向かい合っているからです。成されたわざでは なく、それを行ったお方と、向かい合っています。少しず つ、主ご自身が私たちの視界を占めるようになり、感謝 は賛美へと道を譲ります。『何と素晴らしい救い主でしょ う』、私たちは叫びます、『その方は私たちの主、イエス 様です』と。

November 24

Unto him that loveth us, and loosed us from our sins by his blood . . . to him be the glory and the dominion for ever and ever. Amen. — Revelation 1:5, 6

Every time we are reminded of our redemption through the precious blood of Christ, our hearts well up with thanksgiving and praise. Indeed, that is all we can say, since in this matter there is no need to ask for anything; and in fact it would be unfitting to do so. We cannot invite the Lord to do what He has already done; we can only thank Him for it from our hearts.

Thanksgiving takes account of the Lord's work for us, but praise goes further. We praise Him for what He is. At the outset gratitude overwhelmed us, but as the novelty faded a little it left no vacuum; for we deal not with an event but with a Person, not with an action merely but with the Doer of it. Gradually the Lord Himself comes to fill our vision, and thanksgiving gives way to praise. "What a wonderful Savior," we cry, "is Jesus our Lord!"

11 月 25 日

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教 えよう【詩篇 32:8】

馬もロバも、飼い主に従うようしつけることはできますが、 そのためには、くつわとくびきをつけ、時には、鞭で、打 たなければなりません。しかし、神は、自分の子供たちを そのようなやり方で、導こうとはしません。馬やロバは、 『わきまえのない者』ですが、神の子供たちは、主との近 しい交わりにあずかることが許されており、主のみこころ のあらましを示していただくだけで、それに、十分、対処 することができるのです。

神の御心に関する知識は、正しい方法を見つけるよりは むしろ、正しい人でいるために大切です。神に対して正し くない人に対しては、どんな手立てを使っても、御心を明 らかにすることはできないものです。人が正しければ、神 の御心に関する知識は、それほど大切ではなくなります。 方法など、どうでもよいということではありません。しかし、 神を喜ばせ、御心を知らせていただくための手立てをす べて熟知していても、神のみそばに、静かに寄り添って 歩くことがなければ、それに気付かないままでしょう。強 調すべきはここです。

November 25

I will instruct thee and teach thee in the way which thou shalt go. — Psalm 32:8

The horse and the mule can be made to obey their owner's will, though to realize his purpose he may have to use on them the bit and bridle and even the lash of the whip. God, however, never intended to direct His children in that kind of way. The horse and the mule "have no understanding," but His children can enjoy such an intimate relationship with Him that a mere hint of His wishes will suffice to bring a response from them.

Knowledge of the will of God is not so much a matter of finding the right method as of being the right man. If the man is not right with God, no method will avail to make that will clear to him. If the man is right, then the knowledge of God's will is a comparatively simple matter. This does not rule out methods, but we would emphasize that with the fullest knowledge of all the methods by which it may please God to make His will known, we shall remain in ignorance of it if we are not walking in quiet intimacy with Him.

11月26日

世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信

じる者ではありませんか【1ヨハネ5:5】

神のもとで生きるあなたの霊的な成長が始まる前には、 必ず、自分の現状に対する不満足があります。すべての 成長は、不満足から始まります。あなたは、自分ではど うしようもないところまで追い込まれていると感じ、逃れ 道を探すしかありません。

キリストは私たちの逃れ道です。私たちの中のキリスト は、外から来るすべての必要に対処してくださいます。 自尊心の誘惑を受けたとき、キリストは、私の謙遜となり ます。それを受け入れるためには、ただ、主が入り込む 隙間を作ればよいのです。激情が沸き上がったときは、 キリストは自分を忍耐というかたちで表します。日々の生 活に必要なものはどれも、このひとつのいのちから生ま れ出る善が満たしてくれます。このように、必要にかられ て、キリストを新たに発見することが、神の前における霊 的な成長を刻むのです。

November 26

And who is he that overcometh the world, but he that believeth that Jesus is the Son of God? — 1 John 5:5

You will discover that spiritual progress in your life before God is invariably preceded by dissatisfaction with your current condition. All progress starts from dissatisfaction. You must be pressed to a point where you feel that you have come to an end, that a way out must be found.

Christ is our way out. Christ in us reacts on our behalf to every kind of outside requirement. When my temptation is pride, Christ will be my humility if only I will make room for Him at that hour. When passion is aroused, Christ will express Himself as my patience. Every one of life's daily demands is met by the many virtues that spring from this one Life, and it is these fresh discoveries of Christ in my hour of need that mark my spiritual progress before God.

11月27日

彼らは正しい道を捨ててさまよっています。バラムの 道に従ったのです【2ペテロ2:15】

バラムは報奨を目当てに働いた預言者でした。預言者 の務めを、金もうけのために利用したのです。バラムは 神の御心に無知だったわけではなく、イスラエルは神に 祝福された人々であることを、よく知っていました。また、 神は、彼がバラクの要求に応じて、のろいをかけに行くこ とを、はっきりと禁じました。しかし、バラムは大きな報償 に、心を動かされてしまいました。どうして報償など、手 に入れることができるでしょう?バラムが求めたのは、神 の決心を覆させることです。

その要求は受け入れられ、はじめはうまく行ったように見 えました。実際に、神は、はじめは禁じたことを、許すこと にしました。つまり、主はただ、バラムが自分で選んだ道 を行かせたのです。それは、上の節から分かるように、 決して『正しい道』ではなかったのです。主の道を歩むこ とをやめ、神に見放されて、欲望を追い求める道に進む のは、本当に恐ろしいことです。

November 27

Forsaking the right way, they went astray, having followed the way of Balaam. — 2 Peter 2:15

Balaam was a prophet who worked for reward; he commercialized the prophetic ministry. He was not ignorant of the mind of God and was well aware that Israel was a people whom God would bless. Moreover, God had plainly forbidden him to comply with Balak's request and go and curse them. But the great reward lured him. How could he possibly obtain it? He decided that he would try to get God to reverse His decision.

The plan was carried into effect and at first seemed successful. God actually granted him the permission he had earlier refused. In fact, He simply let Balaam go his own self-chosen way, which according to the above verse was not "the right way" at all. How terrible to be released by God to go one's own greedy way instead of walking in the way of the Lord!

11 月 28 日

私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕える しもべなのです【2コリント4:5】

覚えておいてください。私たちは、キリストを助けるため に、人に仕えるのであり、自分の時間と力をその人たち に捧げるだけでなく、愛をも注がなくてはなりません。仕 える者たちへの神の要求は、非常に厳しいものです。そ こには、自分のことに気を取られる余裕など、いっさい、 ありません。自分の楽しみや悲しみ、恨みに心を奪われ て、気持ちの赴くままに動いていては、私たちは、家具で いっぱいで、他に何も入れる余地のない部屋のように なってしまうでしょう。

違う言い方をすれば、私たちは自分の気持ちはすべて 自分だけに用いて、他の人には向けないことです。私た ちの魂の力には限界があることを、認めなくてはならず、 それは肉体の力にも限界があるのと変わりません。私た ちの感情の力は無限ではありません。一方向に向かう、 同情心が枯れ切ってしまえば、もうどこにも注ぐ気持ち が消え失せてしまいます。他の人の気持ちに入りこむこ とを学びましょう、それは、私たちの心に入ってくださる主 のためです。

November 28

Ourselves as your servants for Jesus' sake. — 2 Corinthians 4:5

We must remember that for Christ's sake we are the servants of others, and we should not only devote our time and strength to them, but also let our affections go out to them. God's demands of those who serve Him are very exacting. They allow us no leisure for self-occupation. If we cling to our pleasures and griefs, grudging to let go of our own interests, we shall be like a room that is too full of furniture to accommodate anything more.

To put it differently, we shall have expended all our emotions on ourselves and will have none to spare for others. We need to realize that there is a limit to our soul-strength, just as there is to the strength of our bodies. Our emotional powers are not boundless. If we exhaust our sympathies in one direction, we shall have none to give in another. Let us learn to enter into the feelings of others for the sake of Him who entered into ours.

11月29日

ー粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それはー つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結び ます【ヨハネ 12:24】

『もし死ねば…。』この死は何でしょう?それは、気温と湿度の具合で固い殻に開いたひび割れのことであり、そこから、一粒のうちにある真のいのちが現われるようになります。キリスト者にとって、内に主のいのちを持ちながらも、自然の固い殻のせいで、そのいのちに縛りつけられ、抑え付けられることは、大いにあり得ることです。 まったく実を結ばないキリスト者がいるというのは悲しい現実です。ここでの問題は、どうしていのちを得るかということではありません。いのちは、改心した時に、もう与えられています。そのいのちを解放して、成長させるにはどうすればよいか、という問題になります。

自分を生まれたときからの殻に包み込んだままにしてお き、十字架を共に背負って、すべてを打ち明けようという、 キリストの呼びかけに抗うなら、実を結んで神に栄光を 帰す可能性を、妨げることになります。自分のうちにある 祝福を喜ぶことが許されるのは、内なるいのちが周りへ と広がって、他の人たちが私たちのいのちから益を受け るときだけです。

November 29

Except a grain of wheat fall into the earth and die, it abideth by itself alone; but if it die, it beareth much fruit. — John 12:24

"If it die..." What is this death? It is the cracking open of the shell by the working of temperature and humidity, so that the true life within the grain can express itself. It is all too possible for a Christian to have the Lord's life in him and yet for that life to be confined and suppressed by the hard shell of nature. So we have the sad fact of a fruitless Christian. In this case it is not a matter of obtaining life, for that came at conversion, but of the release of that life so that it can grow and be fruitful.

If we wrap ourselves in our natural shell and resist Christ's call to share his cross and be broken open, we will hinder the possibility of God-glorifying fruit. We may enjoy some inward blessing ourselves, but it is only when that inner life is dispersed around us that others can benefit from our lives.

11 月 30 日

ただ、神の恵みにより、価なしに義と認められるので す【ローマ 3:24】

ここで、『価なし』と訳されている言葉は、イエス様が詩篇 から引用されている、『理由なしに』と同じ言葉です。『彼 らは理由なしにわたしを憎んだ(ヨハネ 15 章 25 節)。』し たがって、神の恵みが、価なしに義と認めるとは、主がな んの理由も根拠もなく、私たちを義と認めてくださること を意味しています。恵みとは、無償で与えられるもので あり、受け取る側には何の条件もありません。自分をそ こそこ良い者だと考える人も、神の恵みを必要としていま す。その点、パウロのように、自分を『罪人のかしら』と呼 ぶものと変わるところはないのです。

神は、多くの罪を犯したものに与える恵みを減らしたり、 罪の少なかったものにより多くの恵みを与えることはなさ いません。恵みは、あらゆる意味で、報酬とは異なるも のです。恵みが満ち溢れる世界では、罪人も、罪人の働 きも変わることなく、取りあげられます。神が、私たちを救 うのに理由はいらないのです。

November 30

Being justified freely by his grace. — Romans 3:24

The word here translated "freely" is the same as is translated "without a cause" in Jesus' quotation from the Psalms: "They hated me without a cause" (John 15:25). Thus to say that God's grace justifies us freely means that he justifies us without any cause or reason. Since grace is gratuitous, it is not at all conditional on the recipient's state. Those who consider themselves fairly good stand just as much in need of the grace of God as those who see themselves, like Paul, as "the chief of sinners."

God will not give less grace to those who have sinned more, and more grace to those who have sinned less. In no sense at all is grace a reward. In the realm in which grace operates, both the sinner and his works are completely set aside. God saves us without a cause.